



5年ぶりに国際大会で優勝したGarnets

魅せた!! 「チーム全員が 納得する最高の演技」

チアダンス国際大会で5年ぶり栄冠

ソング
リーディング部

楠本彩夏主将(経済3)

黒江菜月副主将(法3)にインタビュー

学生記者 高橋璃々(経済3) 松岡響紀(経済1)

中央大学ソングリーダー部「Garnets」



2008年創部。村田麻里コーチ、楠本彩夏主将。部員数 32 人。チーム名の愛称は村田コーチの誕生石から命名。2023 年に初めて男子部員が入部し、「Garnet Girls」から改名した。

Garnetsメンバー

- ▶ 4年生 = 小峰日和
▶ 3年生 = 赤間愛
楠本彩夏
黒江菜月
小林静流(せら)
徳永実優
中島晴香
藤原捺未(なつみ)
松津花々実
望月紗良
矢田莉子
米田里桜(りお)
千田葵
三神さくら
西部実堯
若松侑里
- ▶ 2年生 = 小澤茉侑(まう)
久保井七豊(ななと)
小町美空(みく)
千葉心渚(ここな)
吉田さくら
- ▶ 1年生 = 青木美咲希
牛嶋さやか
梅園茉優
小川奈乃春(なのは)
高橋結里(ゆいり)
瀧和花(のどか)
土屋紗蘭(さら)
寺田楓
中井さとよ
平井愛海(まなみ)
宝達優苗(ほうたつゆな)

Chuo University, 1st place !! 優勝のアナウンスの瞬間から記憶が飛んでいた。仲間に促されて立ち上がったソングリーダー部(愛称・Garnets = ガーネッツ)の主将、楠本彩夏さん(経済3)は、気づいたときにはすでにトロフィーを手にしていた。「国内の大会でも3位が多く、ずっと勝てていなかった」というチームの快挙に信じられない思いがした。最高の栄冠をもたらしたのは、「やってきたことを全て出して、最高の演技をしたい。全員が納得できる演技をする」というチームの団結力と集中力だった。楠本さんと、副主将の黒江菜月さん(法3)に大会を振り返ってもらった。

表現力、ショーマンシップを重視

優勝したのは、米国カリフォルニア州アナハイムで2024年2月17、18日に開催された「2024 USA Collegiate Championships」の「Pom 4-Year College 部門」。中央大、日本体育大、玉川大の日本の3校と、米西海岸を中心とした大学の計13校が出場した。

チームの見せ場はステージ上の16人の一糸乱れぬフェットテや、2023年に初めて入部した男子部員、久保井七豊さんのジャンプシーンなど。2分間の演技では、「米国の大会では日本以上に表現力やショーマンシップが重視されるため、より魅せる演技を心がけた」という。村田麻里コーチからは「十分に練習を積んできた。自信をもって堂々と、楽しんできて」とステージに送りだされた。

2023年のこの大会は5位。今年はもちろん優勝を目指していた。「去年は雰囲気にもまれていた。(舞台に立たない)サポートの部員も積極的にチームのために動いてくれ、『全員で』挑めたことが今年の勝因」と黒江さん。それとともに、「国内大会よりも観客が近く、アットホームな雰囲気の中で、何より全員が楽しんで踊れた」(楠本さん)ことも勝因に挙がる。

どん底からはい上がった Garnets

2023年夏にスタートした現在のチームは、ミーティングで話し合いを重ね、練習方法を改善しても、目標としたどの大会でも1位に手が届かなかった。そんなチームの成長のきっかけは、3位に終わった2023年11月の全日本チアダンス選手権大会。演技直後、満足できない演技に泣きだしてしまうメンバーが何人も出た。ミーティングで一人ずつ



トロフィーを手にする楠本彩夏さん(右)と、黒江菜月さん

気持ちをぶつけ合い、全員が「このチームで勝ちたい」と思いを新たにしました。どん底から光が見えた瞬間とってよかったかもしれない。

「主将になって最初の3カ月は逃げ出したいと思っていた」と当時の心境を思い返した楠本さんを、黒江さんが「主将は背負うものが大きいから」と思いやる。黒江さんは「一人ひとりで考え方や価値観が違うのは当たり前だけれど、一つのチームにまとめるのは難しい」と続け、2人は「チームの仲間とのコミュニケーションと、団結力の大切さを学んだ」と振り返った。

「一体感」「全員が主役」

チームのまとめ役として、黒江さんは「メンバー一人ひとりにしっかりと寄り添う。周りを見る力が大切」と力を込め、楠本さんは「主将の声色や表情で練習の雰囲気も変わる。いつもチームを明るくできるような態度、姿勢を心がけています」と話す。

ソングリーディング、チアダンスの魅力は「一体感」という。2人は「皆で演技を創りあげていく。全員が主役というところが魅力なんです」と笑顔を見せ、「チーム愛をはじめ、先輩から受け継いだものを後輩たちに伝えていきたい」と語る。今回の優勝を糧として、次は8月のチアリーディング & ダンス選手権大会で日本一になるのが目標だ。

取材後記

憧れのチームで栄冠 2人の深い「Garnets 愛」

学生記者 松岡響紀(経済1)

「ソングリーディング」という言葉、競技名を私は初めて知った。しかし、主将の楠本彩夏さん、副主将の黒江菜月さんの話を伺っていくうちに、大いなる魅力を感じることができた。そして、米国大会優勝までの喜びや苦悩を知ることができた。

インタビューで2人からは、「団結力」と「楽しむ」というキーワードが多く出てきた。やはり集団で踊るには団結力が必須であるが、「楽しむ」に至るまでの背景として、2人からは「苦勞した」というコメントも多かった。

現在のチームで主将、副主将の立場になってからは他の部員とのコミュニケーションに悩み、大会での成績が芳しくなかったという苦い経験から、誰一人として取り残さずに、全員が同じベクトルを向いて練習することの大切さを痛感したと語っていた。

楠本さんは自分の表情、声色に気を配り、練習では笑顔でいることを心がけた。また、国内の大会との雰囲気の違いに戸惑う部員たちを平常心にさせたのは、「全員で楽しもう」という普段からの心がけや、コーチの言葉であっ

たという。うれしかったことも苦勞したことも笑顔ではきはきと語っていた表情は、こうした心がけの賜物なのかもしれない。

話を聞けば聞くほど、2人の「Garnets 愛」を感じ取ることができた。なんと、2人とも入学前から入部を決めていたようだ。そのために高校の勉強に一生懸命励んだというエピソードを聞いた。実際に「憧れのチームの一員になれたことが本当にうれしかった」という。私自身、大学入学後の目標も漠然としている中で、入学後のビジョンをはっきりさせた上で目標を実現させた2人には脱帽するばかりだ。

新しく仲間になった1年生との練習も含め、今のチームに適した練習をしたいと意気込む2人。2023年に入部した初の男子部員の存在も新しい魅力となっている。練習に取り組む姿勢や、目標への熱い想いを聞いて大いに心を動かされた。大げさかもしれないが、学生が模範とすべき姿勢、態度ではないかと思った。日々進化するGarnetsのさらなる飛躍を期待したい。

USA Collegiate Championships

USA (United Spirit Association) は、チアリーディング、チアダンス競技の指導・育成・普及団体で、米国西海岸に本部がある。Garnets が優勝した Pom 4-Year College 部門は、楕円形のポンポンを使うチアダンスの4年制大学の部門という意味。アップテンポな楽曲をBGMとして、2分間の演技の中で、振り付け、技の難易度、正確性、ショーマンシップ、フォーメーション（隊形）などを基準に、4人の審査員が評価した。

夏のチアリーディング&ダンス学生選手権大会（USA ジャパン主催）、秋の全日本チアダンス選手権大会（日本チアダンス協会主催）、冬のUSA Regionals（地区大会）とUSA Nationals（全国大会）と並んで、Garnets が目標としている大会である。



ナンバーワン！

ソングリーディング

肩に人を乗せるなどのアクロバティックな動きは禁じられている。見どころは、体のターンやジャンプなどチアダンスとしての技や動きの切れのほか、片方の足を伸縮させながらもう片方の足を軸に全員でそろって回転するクラシックバレエの動き「フェット」など。

取材後記

「このチームで勝ちたい」思いが結実 サポートメンバーを含む全員の勝利

学生記者 高橋璃々（経済3）

Garnets 主将の楠本彩夏さんと副主将の黒江菜月さんに大会での経験や、ソングリーディングの魅力などをインタビューした。

チームのモットーやスローガンを尋ねると、「守らない、攻める。楽しんで魅せる」「負けるな、笑え」と教えてくれた。この言葉が特に印象に残っている。つらいときも口角を上げて、笑顔で演技することを大事にしていたという。

2023年夏から現在のチームになり、なかなか結果が出ないときが続いた。それまで続けてきた練習方法を変え、何度もミーティングを重ね、時には選手同士で意見し合い、涙を流したこともあった。そして、チームの全員が同じ方向へと目を向けられるように互いの対話を何よりも大切にしてきた。

ソングリーディングは人を肩の上に乗せるチアリーディングのようなアクロバットな動きが禁止され、ポンダンス、ヒップホップ、ジャズ、バレエなど、さまざまな踊りの要素を含んでいる。村田麻里コーチが創る Garnets の振り付けは、アームモーション（腕の動き）に肩や胸の動き

を加えた曲線的な要素を含んでいるのが特長という。

米国での大会は日本と違い、観客との距離が近い。観客の声援もよく聞こえるため、ファイナルでは、盛り上がっている雰囲気を変えて演技に臨んだ。前年の大会は雰囲気にもまれてしまい、思うような結果を出すことができなかったが、今回はその雰囲気を生かして頑張ろうという考えに切り替えることができた。

勝因はとにかく演技を精いっぱい楽しめたことにあった。もちろん結果は大切だが、積み上げてきた練習の成果を発揮できるよう、舞台に立つことができなかったメンバーを含めて一人ひとりが全力を尽くした。

困難な壁が立ち上がったとしても、「このチームだから頑張れる」「このチームで勝ちたい」という気持ちが今回の素晴らしい結果をもたらしたと、インタビューを通して感じた。3年生は、8月の大会で引退するが、チームが代替わりしても、「チーム愛」のたすきは後輩たちにはしっかりと受け継がれていこう。また新たな目標に向けて、ソングリーディング部の活躍に期待したい。



リーグ制覇の表彰状と、記念のメダルを胸に笑顔の功刀史也主将(左)と三浦凌輔投手=多摩キャンパス

東都春季リーグを制覇 9季連続71回目

秋季は新記録に挑戦、強さの秘密は？

準硬式野球部

投打の柱 功刀史也主将(文4)
三浦凌輔投手(商2)に聞く

中央大学準硬式野球部

1947 (昭和 22) 年設立。小泉友哉監督、功刀史也主将。部員数 32 人で、約半数は高校時代に甲子園出場経験がある。優勝回数は全国大会 12 回、東都リーグ戦 71 回、関東大会 15 回。



東都春季リーグ優勝の瞬間、マウンドに集まり喜ぶ準硬式野球部ナイン

準硬式野球部が東都大学準硬式野球の 2024 年春季リーグを制覇した。9 季連続 71 回目の優勝となり、秋に 10 季連続を達成すれば、リーグ新記録になるという。春季リーグで最優秀選手賞を獲得した功刀史也主将 (文 4)、最優秀投手賞とベストナインに輝いた三浦凌輔投手 (商 2) の投打のキーマン 2 人に強さの秘密を尋ねると、チーム内の切磋琢磨^{せつさたくま}と、先輩たちから受け継いだ「伝統の力」を挙げた。

功刀主将、けがからの復活

功刀主将はチームの守備面の充実を春季優勝の理由に強調した。守備強化の成果が出て、チームの失策数は 2023 年秋季 (21 個) から春季は半分以下に激減した。遊撃手の功刀主将自身も春は無失策。国士館大との 1 回戦、無

死一塁の場面では三遊間への打球をスライディングキャッチし、球ぎわの強さを見せてピンチを未然に防いだ。

攻守のかなめである功刀主将は、右太もものけがで昨秋のリーグ戦に出場できなかった。けがが癒えた今冬以降は寮近くの浅川沿いで毎朝走り込むなど、ブランクを取り戻そうと懸命に体を鍛えた。チームにとって主将の春の復活は非常に大きかった。

三浦投手は 2 年生ながら、大山北斗投手 (商 3) と並ぶ投手陣の柱だ。「打たれると熱くなるタイプ」と自己分析するが、功刀主将ら内野陣から「ここは集中だぞ」「このバッターは要注意だ」などと声をかけられ、不思議とマウンドで冷静になれたという。「安心して思い切り投げられる」(三浦投手) という状況をバックが支えたといえる。

「伝統の力」「OB ら周囲の支え」に感謝

年度ごとに選手が入れ替わる学生のチームスポーツで強さを維持することは容易ではない。準硬式野球部の継続する強さの秘密を単刀直入に尋ねると、功刀主将は「先輩



◆ Profile

功刀史也主将

くぬぎ・ふみや。山梨学院高卒、文学部4年。168センチ、70キロ。内野手。右投げ左打ち。中学3年でU15アジア選手権日本代表に選出。高校時代は2年春夏に甲子園出場、3年夏は交流試合に出場した。2024年東都春季リーグでは38打数11安打(打率.289=5位)で、1部リーグ唯一の本塁打を打ち、最優秀選手賞を獲得した。小泉友哉監督は「精神的な柱としてチームを牽引してくれている」と全幅の信頼を置く。

方が残してくれた伝統の力が大きい。多くの支えがあるからこそ、練習や公式戦に一心に打ち込める」と話した。毎年春と夏の合宿では、大勢のOBが駆け付けて、ノックなどの指導に当たってくれるという。

三浦投手も周囲の支えに感謝したうえで、「チーム内でレベルの高い選手同士の競争がある。僕は中大が一番強いと思っているので、中大でレギュラーを取れば他のチームには負けないという自信、プライドが生まれる」

と胸を張った。春季リーグ戦では、自身初の2ケタ奪三振を記録した対日大1回戦を一番のピッチングに挙げている。

夏の日本一、秋季リーグ制覇へ

高校時代、功刀主将は山梨学院高、三浦投手は能代松陽高(秋田)で、ともに甲子園に出場した。高校野球では「あきらめなければ神様は見ている」(吉田洸二・山梨学院

中央大学準硬式野球部

部長	林 和生	
監督	小泉 友哉	
コーチ	新井 貴博	
主将	功刀 史也(文4)	内野手
主務	三橋 朋徳(経済4)	投手兼外野手
	加藤 真樹郎(法4)	内野手
	城 航希(法4)	内野手
	木藤 忠広(商4)	投手
	佐竹 秀也(商4)	外野手
	高垣 昂平(商4)	外野手
	田中 駿佑(商4)	投手
	相野 七音(文3)	外野手
	若林 舜大(文3)	捕手
	岩井 大和(経済3)	内野手
	酒井 尋如(経済3)	内野手
	松浦 祥真(経済3)	外野手
	大山 北斗(商3)	投手
	西岡 汐輔(商3)	投手
	原田 俊輔(商3)	外野手
	山口 剛大(文2)	内野手
	井ノ上 拳汰郎(経済2)	外野手
	岡部 匡人(経済2)	捕手
	田中 元輝(経済2)	捕手
	吉井 愛斗(経済2)	内野手
	三浦 凌輔(商2)	投手
	萬谷 大輝(商2)	投手
	村田 慶二(商2)	内野手
	川原 海来(文1)	捕手
	堀川 琉空(文1)	内野手
	古積 充(経済1)	外野手
	佐々木 悠真(経済1)	投手
	大森 燦(商1)	内野手
	斎藤 舜介(商1)	投手
	沼澤 梁成(商1)	外野手
	山井 祐希(商1)	外野手

東都大学準硬式野球 2024年春季リーグ戦成績

- ① 中央大 10勝1敗(5)
- ② 日本大 7勝6敗(3)
- ③ 帝京大 6勝6敗(3)
- ④ 国士舘大 6勝6敗(2)
- ⑤ 東洋大 6勝7敗(2)
- ⑥ 専修大 1勝10敗(0)

(注) カッコ内は勝ち点



三浦凌輔投手と並ぶ投手陣の柱、大山北斗投手(上)。春季リーグ戦ではマダックス(投球数100球未満の完封勝利)を達成した



◆ Profile

三浦凌輔投手

みうら・りょうすけ。秋田・能代松陽高卒、商学部2年。175センチ、68キロ。右投げ右打ち。高校3年時にチームのエースとして夏の甲子園出場。2024年東都春季リーグでは5勝0敗(2完投、1完封)、防御率0.48と圧巻のピッチングでチームの優勝に貢献。最優秀投手賞とベストナインに輝いた。

準硬式野球

硬式野球との違いは使用球にある。準硬式のボールは、表面と見た目は軟式球のようにゴムで覆われ、中身は硬式球と同じようにコルクを糸で巻いたものが入っている。握った感触や大きさは軟式球と同じだが、打った感触と跳ね方は硬式球と同じ。バットは木製、金属製を問わないが、大半の選手は強い打球が飛ぶ金属製を使用している。

全日本大学準硬式野球連盟の公式サイトによると2023年度の加盟校数は272。

高監督)、「謙虚さがないと成長できない」(工藤明・前能代松陽高監督)という指導者の言葉が強く胸に刻まれているという。

チームは今夏の照準を8月の全日本大学準硬式野球選手権大会に合わせている。前年は準決勝で日大に苦杯を喫した大会に、日本一を懸けて雪辱を期して挑む。大会前には夏恒例の秋田合宿で、下半身の強化を中心に暑さに順応できる練習に取り組み、チームはさらに一段の成長を遂げる。

その先に待ち構えるのが10季連続制覇を目指す東都秋季リーグだ。チームの勝利のため、功刀主将は「無失策の継続と、どの試合でもコンスタントに安打を放つこと」と課題を挙げ、三浦投手は「自分が投げる試合は全てゼロに抑える。体重を増やして球速を上げ、自分がチームを引っ張りたい」と意気込む。功刀主将は2年秋以来の首位打者とベストナイン獲得、三浦投手は防御率1位と最優秀投手賞、ベストナインを目標に掲げている。



(前列左から)桑原廣太郎、林隆羽、土屋安武、原田将成の各選手(後列左から)清水裕矢、岩本大輝、佐々木啓友、呉一弘、佐々木智大の各選手(棋道会囲碁部提供)

春季関東学生団体戦で 準優勝 5年ぶり1部昇格の 秋季「上位進出目指す」

棋道会囲碁部

部長 土屋安武選手(文2)

副部長 岩本大輝選手(国際経営2)



緊張感の中で熱戦が展開された関東学生囲碁団体戦(棋道会囲碁部提供)



部長の土屋安武選手



副部長の岩本大輝選手

棋道会囲碁部が2024年度春季関東学生囲碁団体戦で準優勝し、1部昇格基準を満たす2位以内となった。1部昇格は2019年秋季以来5年ぶり(2020年春季と秋季、2021年春季はコロナ禍の影響で大会中止)。部長の土屋安武選手(文2)は、「学生大会だけではなく、部員個々がさまざまな大会に出場して実戦経験を積み、レベルアップを図る」と力を込め、「秋季の1部でも上位進出を目指したい」と、さらなる飛躍を期している。

1年生2人 チームの窮地を救う

春秋の関東学生団体戦は、棋道会囲碁部が最も力を注いでいる大会だ。各校とも主将、副将、三将、四将、五将

の5人と、補欠5人の10人が出場選手として登録される。

春季団体戦で、中大にとってキーポイントとなったのが3戦目の日本大戦だった。副将、三将が敗れる厳しい展開となり、ともに1年生で四将の佐々木啓友選手と五将の原田将成選手が白星を重ね、3勝2敗として何とかしのぎ切った。

日大戦の前に2戦目(対東京工業大)で初の敗戦を喫し、副部長の岩本大輝選手(国際経営2)が「皆の気持ちが入っていた。まずいなと感じた」と振り返るほど、チームにショックが残っていた。1年生2人がピンチを救う活躍を見せてチームに大きく貢献した格好となった。

この勝利でチームは勢いづいた。主将を務めた林隆羽選手、副将の桑原廣太郎選手、三将の清水裕矢選手の実力者3人を中心に、4戦目以降は一つの対局も落とすことなく、2位を確保した。

主将の林選手は5月の学生本因坊決定戦関東予選で



12大学が出場した団体戦2部は、3日間にわたり熱戦が繰り広げられた(棋道会囲碁部提供)

ロック1位、桑原選手もブロック4位で全日本学生本因坊決定戦(7月)への出場を決め、個人戦でも実力を発揮している。

「勝負」だけではない部活動の楽しみ

部長の土屋選手によると、団体戦に向けて出場希望者を募ったうえで、部内の対局で実力を見定め、対戦相手との力関係も図りながら出場者を決めた。

「初心者も楽しく活動できる囲碁部だということを知ってほしい。勝負に徹することも大切ですが、大会の出場登録者には一度は出場機会を与えたい。できるだけ多くの部員に大舞台を経験してほしい」と土屋選手は話す。部員全員が楽しんで活動できるチーム作りを目指しているという。

日頃の練習での対局は多摩キャンパスの部室のほか、東京・新宿で囲碁部出身の卒業生が経営する碁会所でも週1回行っている。卒業生や他大学の学生らと囲碁を通じてコミュニケーションを図り、和気あいあいと活動できる場所も囲碁部の魅力だ。卒業生との結びつきが深く、卒業生主催の囲碁の研究会も月1回、開かれている。

囲碁の魅力「打つ手は無限」

囲碁は19×19のマス目が書かれた碁盤の線の交点に、

黒白の碁石を対局者が交互に打つ。交点からのびる全ての線(道)をふさぐと、相手の石を取れるという陣取り合戦である。複雑、難解で奥が深く、一朝一夕に実力アップに至るものではないものの、愛棋家はその魅力から碁盤を離れられなくなる。

序盤の打ち方である布石、せめぎ合いの中盤、ヨセの段階となる終盤など、局面、局面で「無限に打つ手はある」と岩本選手。「どんな手も“正解”になり得る可能性がある。そこが囲碁の魅力でもある」と続けた。

囲碁は先に着手し、主導権を握る「黒番」が有利だという。ところが、岩本選手は攻める棋風にもかかわらず、白番のほうの勝率が良いそうで、「本当は攻めが得意ではないのかもしれませんが」と冗談めかして笑った。

一方、オーソドックスに打つという土屋選手は、「どちらかといえば守りの碁」が身上。「中盤の攻防をより有利に展開できるようにになりたい」と課題を挙げ、ネット対局や詰め碁の研究などに余念がない。

「定石はあるが、独自の発想で、好きなように手を打っていきける。難解な局面を考える面白さがある」と魅力を教えてくれた。一方で、囲碁の世界では将棋と同じように対局者が一対一で向き合い、対局中は誰も助けてはくれない。打つ手全ては自分自身の責任であるという厳しい勝負の一面があることも指摘した。

春季関東学生囲碁団体戦 (2024年5月4～6日、東京・目黒区の東京大学駒場キャンパス)

中央大学戦績

▶ 〈1戦目 対千葉大〉

林隆羽 不戦勝○
桑原廣太郎 不戦勝○
清水裕矢 白中押し勝ち○
佐々木啓友 黒中押し勝ち○
原田将成 白6目半負け●

▶ 〈2戦目 対東京工業大〉

林隆羽 黒中押し勝ち○
桑原廣太郎 白4目半負け●
清水裕矢 黒34目半勝ち○
岩本大輝 白中押し負け●
土屋安武 黒21目半負け●

▶ 〈3戦目 対日本大〉

林隆羽 白中押し勝ち○

桑原廣太郎 黒24目半負け●
清水裕矢 白15目半負け●
佐々木啓友 黒2目半勝ち○
原田将成 白1目半勝ち○

▶ 〈4戦目 対埼玉大〉

林隆羽 白51目半勝ち○
桑原廣太郎 黒中押し勝ち○
清水裕矢 白中押し勝ち○
佐々木啓友 黒中押し勝ち○
原田将成 白中押し勝ち○

▶ 〈5戦目 対一橋大〉

林隆羽 黒中押し勝ち○
桑原廣太郎 白中押し勝ち○
清水裕矢 不戦勝○

佐々木啓友 不戦勝○
呉一弘 黒3目半勝ち○

▶ 〈6戦目 対筑波大〉

林隆羽 黒中押し勝ち○
桑原廣太郎 白43目半勝ち○
清水裕矢 黒中押し勝ち○
佐々木啓友 白28目半勝ち○
佐々木智大 黒中押し勝ち○

▶ 〈7戦目 対東海大〉

林隆羽 不戦勝○
桑原廣太郎 黒46目半勝ち○
清水裕矢 白中押し勝ち○
佐々木啓友 黒中押し勝ち○
原田将成 白32目半勝ち○

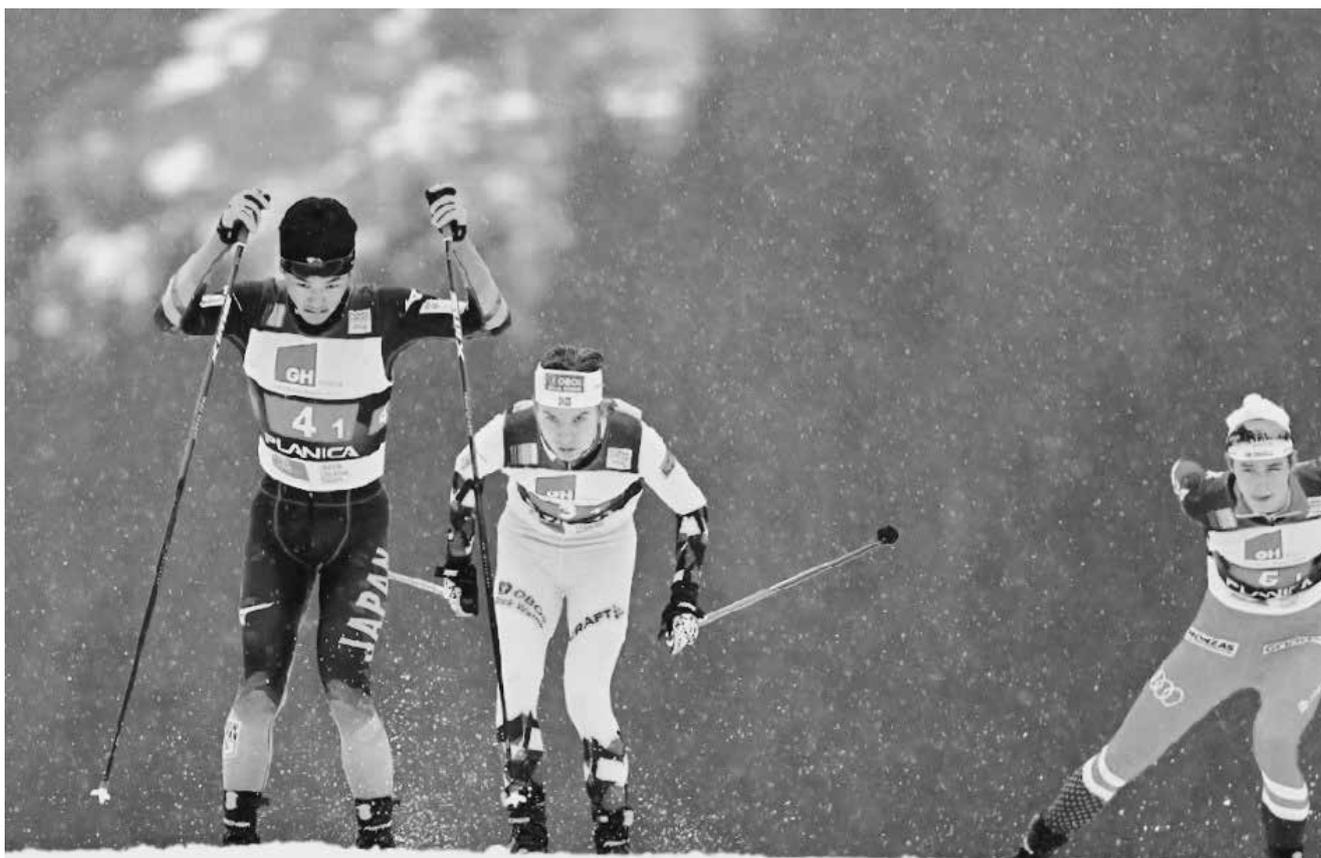
(注) 各試合の持ち時間50分(秒読み30秒)。選手名はどの対戦も上から主将、副将、三将、四将、五将の順。関東学生囲碁団体戦は男女混合の大会で、出場選手に男女の制限はない。女子のメンバーがいる大学も多いという。団体戦2部は参加した計12大学が一定の試合数を行う「スイス方式」と呼ばれるトーナメント方式で争われた。総当たり戦ではないため、試合数は削減される。



団体戦試合会場の様子(棋道会囲碁部提供)

囲碁初心者の入部も歓迎 ○●○棋道会囲碁部○●○

土屋安武部長。部員数は男子15人、女子8人。学年別では4年5人、3年1人、2年9人、1年8人。初心者の入部も歓迎している。新宿囲碁センターと多摩キャンパスの部室(サークル棟)でそれぞれ週1回活動。月1回のOBとの練習会のほか、他大学との交流戦や、中央大学主催の練習会などを開催している。囲碁部と将棋部を合わせた棋道会として、学友会の文化連盟傘下にある。



クロスカンントリーで外国人選手と競り合う山崎叶太郎選手(左)

「世界のトップに」 強心臓で挑む

世界ジュニア・ノルディック複合 混合団体で銀メダル

スキー部

山崎叶太郎選手(経済2)

スキー部の山崎叶太郎選手(経済2)が2024年2月にスロベニアで開催されたノルディックスキーのFISジュニア世界選手権で、複合の混合団体メンバーとして銀メダルを獲得した。翌月の全日本スキー選手権の複合個人でも優勝を飾っている。

「世界ジュニアはチャレンジャーの気持ちで、チームとして良いパフォーマンスができた。銀メダルは今後へのモチベーションになる」。好成績を残した2023～24年シーズンに満足することなく、「いずれは世界のトップに立ちたい」と目標を高く掲げている。

好調なジャンプ 心打たれたチームメイトの走り

「ジャンプの調子が良く、(海外勢に)引けを取らない飛躍ができた」と振り返りながらも、「ジャンプは練習のときのほうが良かった。練習でできたことを試合で出せなかったのが悔しい」と唇をかんだ。ジャンプの好調さは、2023年11月のフィンランド合宿で回数を多く飛び、しっかりとトレーニングを積めたことが裏付けていた。

ドイツに続く2番手でスタートした後半のクロスカントリーでは、スターターの1走を任された。一時は順位を3位に下げたが、粘りの走りで2走へとつないだ。

気温が下がりアイスバーン状になった急カーブで転倒しながらも奮起した2走の池田葉月選手(北海道・札幌日大高)と、3走の藤原柚香選手(札幌市立東月寒中)の女子選手2人の力強い走りに、間近で声援を送りながら、心を揺さぶられたという。

「真逆の肉体、筋力」

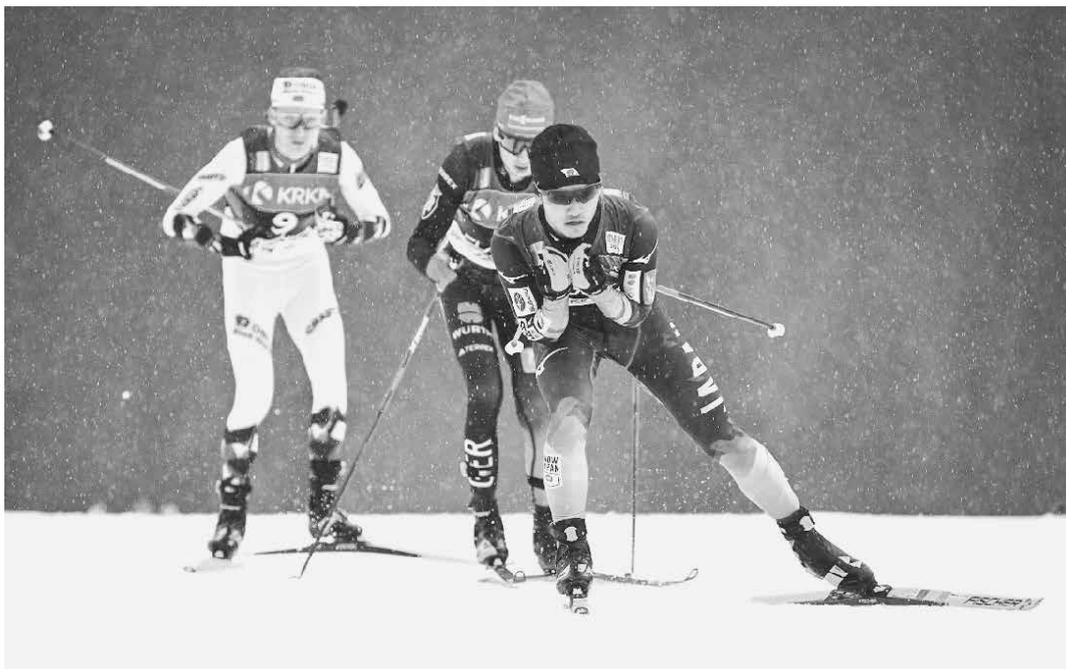
ジャンプ、クロスカントリーという求められる能力が異なる種目で競うノルディック複合は、どのような体づくりがベストなのか。複合のアスリートたちは頭を悩ませ続ける。山崎選手も「ジャンプは足裏の筋肉を使って飛ぶ。飛躍には体重が軽い方が有利だが、クロスカントリーは上半身や脚を中心に筋力が要る。いわば真逆の肉体を求められる」とたとえる。

ジャンプのほう得意という山崎選手自身は「ジャンプのパワーは複合選手の中では強い」と自覚し、「それだ



インタビューではしっかりとした受け答えが印象的だった

けではなく、クロスカントリーの持久力に通じる心肺機能を強化したい」と力を込める。もちろん、ジャンプの精度を上げるため技術面の向上も図るつもりだ。ワールドカップ(W杯)や、2026年のイタリアでの冬季五輪出場を目指すためにも、「今年は特に大事な年になる」と考えている。



隊列の先頭に立つ山崎叶太郎選手



表彰台で喜ぶ日本チームの4人。左端が山崎選手

「試合で上がることはない」「できる」と思うこと、強みに

「緊張感を持って臨みますが、試合で上がってしまうということはない」。山崎選手の特長の一つはたくましい精神力だろう。

どのように培われてきたのかを尋ねると、中学時代までにサッカー、陸上(中長距離)、体操、水泳、自転車など数多くのスポーツを経験する中で、「いろいろな体の動かし方ができるようになり、こうすればうまくいくという感覚をつかめた」と教えてくれた。「『できる』と思うことを強みにしていきたい」とも。ポジティブな思考がパフォーマンスの支えになっているのかもしれない。

来季(2024～25年シーズン)は、世界ジュニアの個人、団体制覇に照準を当てている。W杯出場のためには、W杯に次ぐレベルのコンチネンタルカップを転戦してポイントを重ねる必要がある。

目標の選手は、2020～21年シーズンまでW杯を総合3連覇したヤールマグヌス・リーベル選手(ノルウェー)。一歩でも早く近づけるよう、努力を積み重ねていく。

ノルディックスキー FIS ジュニア世界選手権大会 複合・混合団体 (2024年2月7日=現地、スロベニア・プラニツァ)

		総合タイム	ジャンプ	クロスカントリー
①	ドイツ	41分26秒5	459.7p	41分26秒5
②	日本	41分53秒7	424.1p (+36秒)	41分17秒7
③	ノルウェー	42分28秒7	422.0p (+38秒)	41分50秒7
④	オーストリア	43分06秒5	385.6p (+74秒)	41分52秒5
⑤	フランス	43分06秒9	381.8p (+78秒)	41分48秒9

(注) 混合団体の日本代表は、山崎叶太郎選手(クロスカントリー1走)のほか、池田葉月選手(2走=北海道・札幌日大高)、藤原柚香選手(3走=札幌市立東月寒中)、成田絆選手(4走=秋田・花輪高)。所属は当時。ジャンプのpはポイント、カッコ内はクロスカントリーのスタート時の1位からのタイム差。記録はFIS(国際スキー・スノーボード連盟)の公式ページより抜粋。

ノルディック複合

前半種目「ジャンプ」のポイント、後半クロスカントリーのタイムに換算して争う。ジャンプは瞬発力、クロスカントリーは筋力や持久力などの能力を求められ、総合的な運動能力が試される。複合の王者は欧州で「キング・オブ・スキー」と称される。今回の世界ジュニアの混合団体は、1チーム男女各2選手が出場。各選手のジャンプ1回のポイントをクロスカントリーのタイム差に換算した上で、1走と4走の男子が5キロの距離、2走と3走の女子が2.5キロで争った。



山崎叶太郎選手の前半ジャンプ

◆ Profile

山崎叶太郎選手

やまざき・きょうたろう。新潟県上越市出身、長野・飯山高校卒。経済学部2年。高校時代はインターハイ複合個人で優勝。今回の世界ジュニア翌月の「第102回全日本スキー選手権」の複合個人でも優勝した。父の正晴さんは1988年カルガリー五輪のクロスカントリー日本代表。

171センチ、64.5キロ。シーズン中は63キロに減量するが、転戦する中での体重管理はとくに難しいという。中大スキー部には、ノルディック複合の木村幸大選手、畔上祥吾選手(ともに2024年卒)、中澤拓哉選手(経済3)ら実力のある選手が多く、進学を決めた。スキー部は先輩、後輩の隔てなく仲が良いという。

取材後記

「負けん気が強く、自立している人」
世界の頂点を目指す姿に注目

学生記者 合志瑠夏(経済3)

「世界大会で銀メダルを取れたのは、これまでに獲得したどのタイトルよりもうれしい。だけど、どうせやるなら1位を取りたい」。山崎叶太郎選手は、世界ジュニア混合団体銀メダルという成績にも百パーセント満足せず、そう力強く語る。

中途半端なことが嫌いだという、「負けん気が強く、自立している人だな」という印象を受けた。今回の世界ジュニアではチーム最年長で、「自分がしっかりしなければ」と気を引き締めて臨んだ一方で、クロスカントリーのチームメイトの力強い走りに気持ちを奮い立たせられた。

世界の舞台で戦うことについて、「強豪選手が集う試合では、後半クロスカントリーで追いかける展開になることが多い」と、前半のジャンプでリードすることが多い国内大会との違いを語り、「どんなときも自分のベストを出し、食らいついていきたい」と強調する。

ノルディック複合を戦う山崎選手が「難しい」と語ったのは、ボディメイキング(体づくり)である。「ただ、やみくもに鍛えて、筋肉を多くつけるのではなく、自分にとって必要なものを考え、取り入れる」ことが大切だという。

ジャンプとクロスカントリーでは、使う筋肉が全く異なる。鍛えすぎると体重が増えてジャンプの飛距離に影響す

る。体力強化とともに、心肺機能やジャンプの技術面の向上などを課題に挙げ、ここぞというところで、もう一段階、ギアを上げられるように改善していきたいと話した。

中大スキー部の仲間や全国で戦う選手たちは、山崎選手にとっては「良き友であり、そしてライバルでもある」。試合が始まれば、「自分が勝つ」とハングリー精神にスイッチが入る。スポーツが好きで、サッカー、陸上、体操、水泳など中学時代までにさまざまな競技に取り組み、いろいろな体の動かし方を学んだ。こうした経験が、山崎選手の中に「こうすれば、うまくいく」という選択肢、成功体験を育んでくれた。

活躍の裏には両親の支えもある。両親ともスキー経験者で、幼いころからスキーは身近な存在だった。五輪のクロスカントリー代表選手だった父の正晴さんが、山崎選手の試合でワックスマン(スキー板の滑走面に塗るワックスを調整する専門家)を務めたこともあるという。母は練習場所への送迎や、おいしいごはんを用意してくれた。

将来、目指すのは「世界のトップになりたい」という一点。名前のごとく、夢を叶えるために高く跳び、駆け抜ける山崎選手の勇姿に注目していきたい。